

令和3年度 奈良市立柳生こども 研究実践概要

園長 大原 美幸

全園児数 12名

1. 研究主題 “こころ”も“からだ”ものびのびと
～心が動く、体が動く、いきいきと遊びこむ子どもの育成を目指して～

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

子ども達は、広い園庭で体を動かして遊ぶことが大好きで、築山登りやボール遊び、砂遊びなどクラスの枠を超えて元気い遊んでいる。しかし、経験不足から体の使い方、力の入れ方、自分の身体のイメージがつかみにくかったり、自身が持てずに大人の声掛けを待つ子どもの姿も見られることから、体幹を鍛えていくことで、“出来た”ことの喜びが自信につながり、毎日の遊びの中で継続して年齢の発達に応じた運動遊びを取り入れている。日々の遊びや、さまざまな経験から芽生えた“やってみたい”子どもの心の動きを大切に、主体的な遊びへとつながる保育の環境構成や援助の在り方について考える。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・保育活動の中で、体幹や基礎体力を育む運動遊びを積極的に取り入れ、子ども自ら体を動かす心地よさや楽しさ、さまざまな活動からの積み重ねによる意欲の高まり、自己肯定感の育成につなげていく。

②研究の重点

- ・基本的な生活習慣、生活リズムの育成
- ・1歳児から5歳児までの発達過程を理解し、それぞれの年齢に応じた“育みたい力”や運動能力、意欲につながる豊かな経験を遊びの中に取り入れながら、子どもの体力、気力の向上を目指す。
- ・子どもの“もっとやりたい”・“もう一回”・“こうしてみたい”などの思いを大事に受け止めた遊びの環境づくりを探る。
- ・地域の環境や人材を活かし、感動体験が積み重ねられるよう、保育内容の充実を図る。

③活動の方法

1、2歳児 事例「わたしもしたーい！」

毎朝、幼児組の体操の曲が聞こえると、子ども達は「あっ！」と、嬉しい表情になる。A児(2歳児)：「やっぱり、あるこう♪だ。私もしたーい。」B児(1歳児)：「きた。きたあ。」と、テラスに出ていき、大きい友達のする動きを真似ながら、一緒に身体を動かしていた。A児が保育者のそばに来て「せんせいもしようよ。」と誘いに来る。3人で顔を見合わせてニコリ笑顔で気持ちを共有する。楽しいリズムに合わせて手足や全身を動かしながら、跳んだり、回ったり、かけ足をしたりして、体操を楽しんでいた。

体操が終わった後は、みんなと一緒に体操に参加したことに満足げな表情で、「あ〜、楽しかった！」と自然と楽しかった思いを言葉に表す A 児。小さいながらも全身から“やりたい”、“やってみよう”気持ちが伝わってくる場面であった。

〈成果〉

好きな曲が聴こえてくると体を動かすことを楽しみ、ワクワクする気持ちを抑えきれずに活動に参加する 2 歳児。大きな友達の遊ぶ様子もよく見ていて、まわりからの刺激を受けながら、興味・関心が広がってきている。十分に遊んだ後は「たのしい」という言葉がよく聞かれる。これからも、子どもの表現しようとする気持ちを受け止め、共感していくことで子どもの“やりたい！”という意欲につなげていく経験をたくさん重ねていきたいと思う。

3 歳児事例

1 学期、運動経験の少なさから体幹の湯浅を感じる姿が遊びや生活場面の中でよく目についた。何もない場所ではつまづく、転ぶなどの姿や、椅子に長く座ってられない、又園庭では築山のぼりを楽しむ年中・年長児に刺激を受けて登ってみようとするが、登れずに諦め見ているだけの子どもの姿があり、子ども達が毎日、継続して楽しみながら“身体づくり”の土台からスモール・ステップで取り組める運動遊びを取り入れることにした。

毎朝、園のみんなでリズムに乗って体操をした後、“チャレンジタイム”を設け、子ども達の目につくところにコーンをおいてかけっこを楽しめるコーナーを設けたり、フープをグーパー跳びが経験できるコーナー等を用意し無理が無いよう取り組んだ。チャレンジ回数も増え、回を重ねるうちに自分たちでフープを並べ替えて跳ぶ等の姿が見られるようになり、出来た時は保育者と喜びを共有したことで子ども達はどんな事にも積極的に取り組もうとする姿勢が見られるようになってきた。

2 学期より、4・5 歳児と共に一日を過ごすようになり、自由遊び以外でも様々な活動を一緒にする機会が増えたことで、子ども達の興味・関心の幅が広がった。まわりから刺激をたくさん吸収し、子ども達の“やりたい”、“やれるかも”、“できた”経験が増えたことで、表情もいきいきとし、自信がついたことで自己発揮できる場面では大きな声で自分の気持ちを伝えられるようになってきたことは、毎日の継続した取り組みの成果であると実感した。

また、11 月の事例として、園庭のイチョウがきれいに色づき落葉を始めた頃、風邪が強く吹く日があった。あつという間にイチョウの木のまわりは『イチョウの絨毯』になり、その様子を年中児は驚き、感じたことを口々に言葉で発していた。一緒にいた 3 歳児が持っていたイチョウの葉っぱも、その瞬間に飛ばされフェンスにくっついて取れなくなってしまった。その様子を見ていた子ども達は、一瞬目にした不思議な光景と、風が吹いたら自分達も楽しい経験が出来るかもという“ワクワク”感を期待し、同じように葉っぱを集めてはパッと手から離すことを繰り返した。フェンス一面がイチョウの葉っぱに覆われていく様子が面白く、みんなで大笑いをしていた。「全部、くっついたらどうする？」との年中児の言葉に、もっとくっつけてみたいと思う 3 歳児の発想。そのうち風が止んでパラパラと地面に落ちていく様子を見ていた時、「何の力でくっついてたのかな？」と問いかけてみた。

すると、すぐに「風の力や！」と答えが返ってきた。身近な自然環境から偶然味わうことが出来た一場面だが、子ども達の豊かな感性の育ちを身近に実感できた。四季折々の草木の匂い、風の温度差、日差しの強弱、菜園活動を通して目にする食物の変化など、五感をとおして目に見えない豊かな心の育みを実感した。

3 学期、耐寒かけ足に初挑戦。異年齢の友だちと一緒に園庭を音楽に乗って走る経験をした。走った後は体からタオルを抜き取り、汗を拭くことを覚えた。最初は背中をゴシゴシ拭く動作が難しく保育者に手伝ってもらうことが多かったが、終わりの頃は、動作もスムーズになり、自分で出来る喜びが表情からも読み取れた。今年の冬は寒い日が多く、園庭のあちらこちらに氷が張った。4・5 歳児と共に氷見つけを楽しみ、いろいろな発想からかき氷屋さんを楽しんだり、形からいろいろなものをイメージしてみたり、想像力がふくらむ経験が出来た。このように学期や四季を通して子ども達が感じとった豊かな経験や学びの芽を大事につなげていきたいと思う。

〈成果〉

心も体ものびのびと動く経験として、3歳児は園生活の中で経験することがはじめてのことも多く、まずは、やってみたいと思える心が育ってほしいと思い、出来ることからスモール・ステップで繰り返し取り組むこととした。気持ちが動かない時は、無理に誘うことなくやりたくない気持ちに寄り添い続けることに重点を置いた。運動遊びに親しみのある音楽を取り入れたり、一つ一つ出来た事を褒めることで、自信を持ち自己肯定感につながるように心掛けた。経験を積み重ねることで園庭で鬼ごっこをして走っても、疲れた様子で休む姿が少なくなり、築山も保育者が手助けしなくても自力で登れるようになった。少人数であるがゆえに大人を求めがちになって遊びも小さくなってしまいがちだったが、年中児、年長児と一緒に活動することで憧れや競争心も芽生え、どんなことにもチャレンジする気持ちが育ってきたと思う。

4・5歳児

進級時、それぞれが自己主張が強く、友達とのトラブルや保育者への依存心が強い子どもが多いクラスだった。リズムに合わせて体を動かすことが好きな子ども達で、1学期は歌をうたったり、わらべ歌遊びを取り入れたりしながら、友達と気持ちを合わせることや繋がって遊ぶことの心地よさを体験を通して味わってほしいと取り入れた。リトミックは計画的に取り入れ、『アヒル』の動きで股関節を柔らかくして、足で地面を蹴る力を養い、『つばめ』の動きでは、両手で羽をイメージして風を切って走るなど、全身を使って動きを楽しむ経験をとり入れたことで、体を支える力がついてきた。

2学期には、太鼓を取り入れリズム打ちを始める。友達の太鼓の音を聞いて自分も合わせてたたくことにより、集中力に加え、協調性もみについてきた。また、チャレンジタイムで縄跳びや鉄棒、5歳児は跳び箱に挑戦し、失敗を繰り返しながらも前に向かおうとするたくましさや心の強さが育ってきたと感じる。

幼児組・事例「ぼくのしんぞうはここ。」

園の周りの田んぼにおたまじゃくしがたくさんいることを発見したA児。早速、みんなで見に出かけた。すくってきたおたまじゃくしを水槽に入れて眺めていると、「心臓はどこにあるのかな？」と言うので、図鑑で調べたり、保育者が調べたりしたことを伝えると、「ぼくの心臓はここ。」と自分の心臓をおさえる。それを見ていたB児が、「わたしもある。」とおさえる。絵本で体の様子をみんなで見て「心臓はドキドキ動いているから、みんなが動いたりごはん食べたりしているんだよ。」と話をした。

7月に『へいわ週間』を設けていて、命の大切さを知る機会として絵本『おりずるにのって』を読んだ。主人公が友だちといっぱい遊びたかった気持ちになって考え、友達と仲良くするにはどうしたらいいかということ話し合った。「ほしいときはかしてっていう。」とか、遊びに入れてほしい時は「いれてっていう。」等、自分の気持ちを伝える大切さを知ることが出来た。自然とのふれあいの中で、偶然見つけた一人の子どもの“疑問”に、友達を巻き込み、みんなで不思議と向き合うことで子ども同士の共通の話題が生まれ、そこからまた新たな疑問へとつながり、やがて“命があるから生きている”事の意味を知る機会へとつながった。

〈成果〉

身体の機能が著しく発達していく幼児期に、夢中になれる遊びの中で自分の思いを表現する楽しさを味わい、友達の思いを知ったりする経験が出来たことで友達へのかかわり方も変わってきた。友達と心地よい会話のやりとりの仕方や、解決の方法を見つけていけるようになってきたことで、トラブルが少なくなってきたように思う。少人数がゆえに友達関係が固定してしまいがちだが、今後もいろいろな体験を積み重ね、豊かな自然と触れ親しみなが

らいきいきと自己発揮できる子どもの育成につなげていきたい。

5. 研究の成果

子どもが自ら「～したい」と思い、遊び出す根底には、乳幼児期からの情緒の安定く大切にされている安心感が育まれていること、また、子どものその時々のおもいに丁寧に寄り添うプロセスこそが乳幼児期の“しなやかな”心と体づくりの土台となっていくと感じる。本園は豊かな自然に囲まれ、身近に触れ親しみ遊べる環境にある。園児達は穏やかで素直な優しい心が育まれていると実感する。素直で優しい心とは、まわりの人々から大事にされ育てられているからこそ、“その子らしさ”を発揮し、また、自分以外の人にも優しく接することが出来るのであろう。心の育みは乳幼児期の遊びに向かうプロセスの中にも、発揮される。子ども自身が夢中になって、繰り返し深くかかわる経験の積み重ねは、「もっとやってみよう。」「次はどうなるのかな？」と物事に思考を巡らし、その先に自分達の納得のいく成果が得られたと感じた時、また一つ深い学びとなって『生きる力』に繋がっていくと感じる。子ども達が本当に『嬉しかった』と喜びの手応えのあった幼児期の経験を見逃さず、保育者は子どもの興味・関心に寄り添い、きっかけを見つける手助けをし、子どもの持つ“力”を引き出していくこと、そのためには「できる」、「できない」にこだわらるのではなく、子どもが失敗した時、上手くいかなかった時の場面において、保育者がどのように受け止め、気持ちに寄り添っていくか、また、子どもに幅広い選択肢の中から好きなことに取り組める遊びの環境のあり方、じっくりと取り組める場と時間のゆとりの確保があつてこそ次に向かえると感じる。

6. 今後の課題

少人数の中で子ども同士の高め合い、集団での育ち合いという場が限定されていることが多いため、保育者は子どもの遊びや活動を通して育てたいことに思いを馳せ、子どもの成長過程を丁寧に読み解くことが大切であることを実感した。

「できる」、「できない」のこだわらるのではなく、子ども達が今、何をどのようにたのしんでいるのか、十分に自己発揮できる環境構成となっているか、常に子ども達の心が動いた瞬間を保育者はタイミングを逃さずに寄り添い、言葉をかける姿勢を心がけることに共通理解をしていきたい。園でしかできない豊かな経験との出会い、「明日、またやろう。」と子どもの探求心の一歩先に視点を置いて子どもの思いを繋げられる保育を実践していくために今後も子ども同士が高め合い、育ち合える保育と環境について探っていきたい。